みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

コンポストをめぐって (私のスケッチ・ブック (11))

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005894

私のスケッチ・ブック(11)

コンポストをめぐって

国立民族学博物館 助教授
森　明子

■コンポスト

コンポストということばをご存知だろうか。外来の言葉がどんどんふえる日本社会に、最近登場した語の一つで、そろそろカタカナの日本語になりつつある。英和辞典（研究社）をひくと、「しっくい、配合土、培養土、堆肥、コンポスト、混合物」とある。日本でもさまざまな場面で使われているようだが、私がここでとりあげようと思っているのは、家庭用生ゴミ処理器としてのコンポストである。商品名の一部に使われることもある。

留守の多い私の生活では、鉢植えを置くことすらままならない。当然のことながら、こういう商品とは縁がうすくなるが、婚家の母がこれを持っているので、お世話になることもある。先日、朝顔の鉢をひっくり返して土をふるいにかけていたら、いろいろなものが出てきた。コンポストでつくった土である。

土を調べて初めに感心したのは、生物のたくましさである。蟻の集団生活が営まれていたらしく、天地がひっくりかえってパニックをきたした蟻集団が、即座に、わやわやと動き始めた。よく見ていると、中には冷静なものもいるらしく、卵らしいものをかかえて移動を始める部

隊がある。といっても、どこに移動しようという方向は見えていないらしい。パニックをもよおした蟻の動きは、鉢の土をふるいにかけて、柔らかな一山ができるころには、もう見えなくなった。この土の山の中に新しい住みかを築いているのだろうか。

蟻のほかに、土の中には、どこから来たのかと思う大きなみみずが3匹住んでいた。ふるいの中であわてている。あまり長い間日光にあたっていてはみみずにとってよくないだろうとも思ったが、手にとる気にもならず注視していると、そのうちふるいの目から落ちて、再び土の中にもぐっていった。みみずは土をたがやしてくれると聞いたことがあるので、また働いてもらおう。

土の中から出てくるのは生物ばかりで

はない。ラップの切れ端や、スーパーで野菜の袋の口をしめていた赤いテープの端などが見える。入れないように注意していても、入ってしまうものはある、いつごろ捨てたゴミだろうか、と思う。

しじみの貝殻もときどき出てくるのだが、その量から推して、貝殻のほとんどは土にもどっているらしい。母は、鯵のひらきの骨は捨ててもよいが、鶏の骨はだめだといっていた。私が知らずに鶏の骨を入れたときのことである。ところが、その骨が出てきた。するとこれはたぶん3年前くらいだろう。3本、4本、まったく形をかえていない。まざまざとした形が土の中から突き出しているのは、妙に印象深く、じっと見入ってしまった。

■選　ぶ

処理器に入れる生ゴミには、入れてよいものと悪いものとがある。母の家で料理するときは、これは入れてもいいな、と一瞬考えてから「生ゴミ用」のビニール袋に入れるのが習慣になった。この袋の中身をのちにコンポストに入れる。しじみの貝殻はよいらしいが、あさりやはまぐり、さざえなどの貝は遠慮している。理由は、とても土にかえりそうには見えない、頑丈なつくりをしているからである。私がなぜ鶏の骨を入れたのかといえば、鶏の骨が柔らかいという意識があったためだろう。実際鶏の骨は、牛や豚の骨とは比べものにならないほど柔らかいではないか。私の意識の中で、鶏の骨はしじみの貝殻と同類で豚や牛の骨ははまぐりと同類、というアナロジー（＝類推）ができていたのだと推測する。が、これは失敗だった。

私がとくに意識するものとして、ほかに玉ねぎとにんにくの皮がある。「？」と思われるかもしれない。これは私がオーストリアの農家で生活していた間に培われた習慣である。オーストリアでは、生ゴミ処理器は使っていなかった。そのかわり、野菜屑などは白いプラスチック製のバケツに集めておいて、朝夕の豚の餌の一部にあてていた。しばしば台所に立っていた私は、このバケツを「生ゴミ」入れと心得て、さまざまの野菜くずを入れていたものだ。玉ねぎとにんにくの皮は私にとって、生ゴミにほかならないから、当然このバケツに入れた。しかしあるとき、主婦に注意された。理由をたずねると、その薄い皮は消化されないばかりか、豚の胃壁に貼りついて豚の身体に悪影響を及ぼすからという。なるほど。私は、生ゴミを捨てるのに、豚の胃袋のことなど思いもよらなかった。

村では、どの家庭もほぼ同型のバケツを使っていて、それを流し台の下に置いていた。同じ場所にもう一つバケツを置いていて、そこには燃えるゴミを入れていた。私の目に、二つ並んだバケツは、日本の台所に置いてあるのと同様の「生ゴミ」と「燃えるゴミ」のゴミ箱として映っていたのである。しかし、これは似て非なるものであった。

主婦は一方を「豚のため」と呼び、残りもののパンや料理もここに入れていた。私よりはるかに倹約家である主婦が、私でももったいない、と思うようなものを

入れることもあった。「まだ食べれるんじゃない？」と私がいうと、「豚が喜ぶ、豚も食べ物が必要だ」と答えていた。私はバケツにモノを入れる行為から、いつまでたっても「捨てる」というイメージを払拭できなかったようだ。

もう一方のバケツは「紙類」と呼ばれていて、これは薪の着火材となった。薪はセントラル・ヒーティングの熱源である。いずれも単なるゴミではなかったわけである。

■育　て　る

「豚のため」の白バケツは、コンポストに入れるために生ゴミを集めておくビニール袋と比較できる。

「豚のため」の中身は、やがて豚の胃袋におさまり、時をへて豚の排泄物に姿をかえる。敷いておいた藁の上に出されたそれを、主婦は毎日集め、屋外に積みあげておくと、やがてそれは堆肥といわれるものになる。この堆肥は１年に１～２度の周期で、菜園や畑をつくるときに土の上にまかれる。

一方、ビニール袋からコンポストに移された生ゴミは、一定の時間をおいたのちに土となる。ある程度の量がたまったところで、プランターの植え替えに古い土と混ぜて使う。

豚の胃袋はコンポストに対応する。生ゴミ処理器をコンポストと命名する意図は、豚がつくる堆肥との類比にあるのだが、豚に食べ物を与えるのと、コンポストに生ゴミを入れるのとでは、豚と専用器という対象そのものの違いをおくとしても、それを扱う人間の側にも、対象への接し方、感情、労働の質や量、そのリズム、そのとき感じる臭いにいたるまで、大きな違いがある。

一方は、人と家畜との長いつきあいのもとに築き上げられた技術であり、さまざまな工夫が加えられてきたとはいえ、近代や現代の社会の節目にも断絶することなく維持されてきた。他方は、近代都市においていったんは見捨てた「土」との関係を、現代都市に生きる住民が、もう一度とりもどそうと思い立ってつくりあげた現代のテクノロジーであり、まさしく現代都市に位置づけられる実践である。

このあきらかな断絶を経て、性格の違いを含み込みながら、現代テクノロジーにコンポストの名前が与えられ、流通していくのである。言葉や物の意味が、空間を超え、時間を超えて広がったり、屈折していったりする過程を、私たちは目の当たりにしているといってよいだろう。

とりわけゴミ処理は、20世紀の末になって世界大（グローバル）のスケールで意識化され、新しい意味を与えられつつある事象である。その背景をあらためて意識して見れば、

「堆肥」というかつてはもっとも卑俗な対象であったものが、現代において新しい意味を獲得しつつ、社会的な地位を上昇させてきたことが、それなりの意義を帯びて見えてくる。

■グローバル化の中で

ところで、堆肥は現代世界の価値基準の中で、たしかに再評価されたが、その高められた評価は、村で実際に堆肥をつくる人の評価と適合しているわけではない。環境や健康をうたうグローバルな価値づけが、生活に根ざしたローカルな価値と齟齬(=いきちがい)をきたすところが、現代世界のやっかいなところである。

オーストリアで私が生活した村では、この10年ほどのあいだに家畜を手放す家が、飛躍的に増加している。家畜を手放すことは、堆肥をつくらないことを意味する。しかも、まさにこのことが、家畜を手放す主たる要因なのだ。というのも、人々は毎朝毎夕欠かすことができない畜舎仕事の拘束や、堆肥から発する臭いから解放されたいと望むがゆえに、家畜を手放す。それを裏付けるように、畜舎仕事をしなければならない伝来の豚や牛を手放して、そのかわりに冬でも放牧しておける、寒冷地に適応した牛を新たに飼いはじめている農家もある。

人々に畜舎仕事を放棄させたもっとも大きな要因は、農村の時間とは違う現代世界の時間意識である。学校や職場に通うようになった人々は、それでもしばらくのあいだは自家で家畜を飼っていた。しかし、畜舎仕事があるかぎり、休暇があっても旅行に行くことはできない。

一方には、自家で育てた健康な肉や自然に親しむライフスタイルへの高い評価がある。しかし、ローカルな世界の人々は、このようなグローバルな世界で見直されたポストモダンの価値よりも、バケイションを楽しむモダンなライフスタイルに軍配をあげたのである。人々にとって捨てがたかったのは、むしろ自家で育てた豚の味に対する自信と執着、家畜を育てることへの愛情と矜持(=誇り)のほうだったのではないかと私には思える。

環境とか健康とか、そういう価値を見直すのはたいへん結構なことである。このような再評価は、現代テクノロジーの先端に堆肥を位置づけることで進められている。堆肥をコンポストと呼び換えるのは、そのための手続きのひとつと考えることができる。一方、このような現代テクノロジーを経ない本来の知恵のほうは、匿名的なグローバルな世界においては持ち上げられても、ローカルな生活世界でそのような価値はたいして意味をもたずに、結局、捨てられてしまうこともままある。グローバル化の中のローカルな世界では、そういうねじれが起こっているようだ。